

〈研究ノート〉

鳥取大学における教職志望者に関する意識調査

2007～2014年度の比較

大谷直史・柿内真紀

Attitude Survey of Applicants for the Teacher Certification in Tottori
University: Results from Comparative Data 2007-2014
OOTANI Tadasi, KAKIUCHI Maki

1. 課題の設定と調査方法

本稿は2007年度から2011年度の教職志望者の意識変化を示した「鳥取大学における教職志望者の意識」(『教育研究論集』第3号掲載)の続編にあたる。前回の報告に、2012年度から2014年度のデータを加え、学部学科別の差異を明らかにすることで、教員免許状取得を希望する学生および各学部の教職指導・支援の一助となることを意図した。

調査は、1年次学生が主対象である教職必修の授業「人間と教育—教職入門—」の初回に配布・回収した。なお2007年度の調査開始時は前期開講の講義であったが、2011年度から後期に移動したため、調査結果の比較には注意が必要である。

年度間の比較については、1年生の回答に限定した。教職及び就職に対する意識に関しては、学年の影響は大きいと考えられるためである(とりわけ入学したばかりの1年生と就職活動が始まっている3年生)。

2. 調査結果

1) 調査対象者の属性

「人間と教育」は1年次からの履修科目であるが、教職科目の履修方法は学部ごとに設定されているため、2010年度までは農学部は2年次指定科目になっていた。2011年度以降はすべての学部で1年次配当の履修科目とし、教員免許状取得希望者(迷っている場合を含む)には、この授業を入門科目として教職履修を始めるように履修指導をおこなった。そのため、2007年度は1年生の割合が64.0%、2008年度は67.8%であるが、2012年度85.6%、2013年度95.5%、2014年度96.3%と近年1年生がほとんどを占めるようになっている(表1)。実回答者数は、変動がありながらもおよそ200名前後であり、近年増加傾向にある。

表1. 年度ごとの学年・性別構成比 (%) (人)

年度	1年	2年	3年	4年	その他	無回答	男	女	無回答	実人数
2007	64.0	21.8	7.6	4.1	2.5	0.0	34.9	65.1	0.0	197
2008	67.8	24.0	5.5	2.1	0.0	0.7	26.3	73.7	0.0	146
2009	57.5	24.7	10.3	4.0	1.7	1.7	50.0	50.0	0.0	174
2010	70.3	17.8	7.6	3.4	0.0	0.8	44.6	55.4	0.0	118
2011	68.2	20.4	4.5	5.0	1.0	1.0	43.1	56.9	0.0	201
2012	85.6	6.7	6.7	1.0	0.0	0.0	57.3	42.1	0.6	208
2013	95.5	0.4	2.1	1.6	0.4	0.0	55.6	44.4	0.0	243
2014	96.3	1.9	0.9	0.0	0.5	0.5	53.4	46.6	0.0	216
総計	77.4	13.4	5.3	2.5	0.8	0.5	48.0	51.9	0.1	1503
実人数	1163	202	80	38	12	8	558	604	1	

表2は学部ごとの回答者の推移を示したものである。地域学部のうち、地域教育学科はこの授業が学科必修の科目であり、かつ、小学校教諭及び幼稚園教諭の課程認定を受けており、当学科の入学者の多くが教員志望であるため、他学科と区別して集計した。また学内で唯一、数学の免許状が取得できる工学部の応用数理工学科は例年教職科目の履修者が多いため、同学部の他学科と区別している。なお「地域学部」は地域教育学科を除いた地域学部の所属を示している（工学部も同様）。以下、「学部学科」と記載する場合には、この5つの区分を用いる。

表2. 学部学科別学年男女人数 (人)

学部学科	年度	1年	2年	3年	4年	その他	無回答	総計	男	女	無回答
設問なし	2007	126	43	15	8	5		197	80	117	
	2008	99	35	8	3		1	146	48	97	1
	2009	100	43	18	7	3	3	174	90	81	3
地域学部 地域教育学科	2010	47		1				48	13	35	
	2011	53	1	1	1			56	10	46	
	2012	51						51	17	33	1
	2013	51		1				52	19	33	
	2014	52	2					54	21	33	
地域学部 その他の学科	2010	13		4	2			19	8	11	
	2011	23	14	4	4		2	47	19	27	1
	2012	53	2	3				58	31	27	
	2013	68			1			69	31	38	
	2014	59	1	1				61	38	23	
工学部 応用数理工学科	2010	20	3	2	1			26	21	5	
	2011	27	3					30	23	7	
	2012	21		1				22	21	1	
	2013	32		1				33	29	4	
	2014	35						35	27	8	
工学部 その他の学科	2010	2	6		1			9	7	2	
	2011	20	5	2	2			29	16	13	
	2012	16	8	5	1			30	24	6	
	2013	40	1	1	1			43	34	9	
	2014	13		1				14	11	3	
農学部	2010		12	2				14	8	6	
	2011	14	18	2	3			37	24	13	
	2012	35	4	5	1			45	29	16	
	2013	41		2	2	1		46	25	21	
	2014	49	1					50	19	31	
無回答	2010	1					1	2	1	1	
	2011					2		2		2	
	2012	2						2	1	1	
	2014					1	1	2	1	1	
総計		1163	202	80	38	12	8	1503	746	751	6

※所属学部・学科は2010年度からの設問のため、それ以前は不明。

表3は、学部学科別の出身地である。鳥取県と兵庫県がともに20%程度で最も多く（過去5年間）、岡山県・島根県と近隣県が続く（2009年度までは設問なし）。地域教育学科・地域学部では鳥取県出身者が多く、応用数理工学科・工学部では兵庫県出身者が多い傾向がある。

表3. 学部学科別出身地 (人)

学部学科	年度	鳥取	兵庫	岡山	島根	広島	大阪	京都	その他	無回答	総計
地域教育 学科	2010	15	5	9	8	2		2	4		47
	2011	17	7	9	5	3	1		9		53
	2012	18	6	5	5	6		3	3	3	51

	2013	16	13	7	1	1	2	7		51	
	2014	11	8	6	10	3	2	9		52	
地域学部	2010	2	5	2				4		13	
	2011	9	5		2	1	2	3		23	
	2012	11	6	5	8	5	2	9	1	53	
	2013	23	18	7	3	1	1	13		68	
	2014	14	16	4	2	5	1	10		59	
応用数理工学科	2010	1	6	1		2	1	8		20	
	2011	4	8	1	2	4	1	6		27	
	2012	2	3	3	1		2	6	1	21	
	2013		8	3	3	1	2	7		32	
	2014	2	9	2	1	2	3	13		35	
工学部	2010		1					1		2	
	2011		10		2			6		20	
	2012	2	7	1		3	1	1		16	
	2013	4	12	1	2	1	6	10		40	
	2014	2	4	1			3	1		13	
農学部	2011	3	1	1			1	6		14	
	2012	4	7	1	4	1	7	8		35	
	2013	5	10	3	2		4	12		41	
	2014	4	5		4	3	6	17		49	
無回答	2010							1		1	
	2012	1							1	2	
総計		170	180	72	65	44	45	41	174	6	838
割合(%)		20.3	21.5	8.6	7.8	5.3	5.4	4.9	20.8	0.7	100

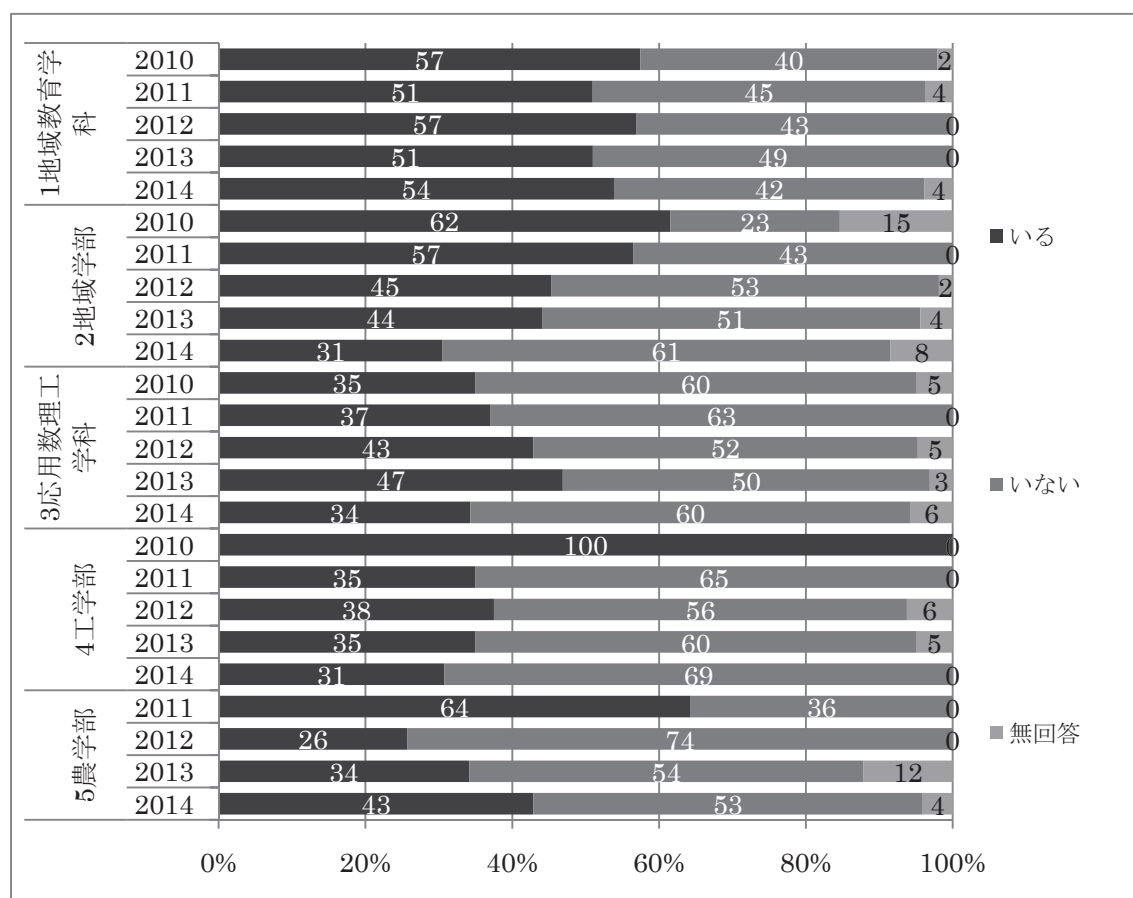


図1 学部学科別近親者の教職就業者の有無 (年度別)

表4は、家族や親戚などに教職に就いている者がいるかどうかを尋ねた結果である。およそ半数が身近な者が教職に就いていると考えてよいが、近年その比率は減少傾向にある。図1に学科別の傾向を示したが、地域教育学科は一貫して5割以上が教職に就いていると回答している。

表4. 近親者の教職の有無(年度別)(%)

年度	いる	いない	無回答	総計
2007	43.7	55.6	0.8	100
2008	56.6	43.4	0.0	100
2009	45.0	55.0	0.0	100
2010	53.0	42.2	4.8	100
2011	48.2	50.4	1.5	100
2012	43.8	53.9	2.2	100
2013	42.7	52.6	4.7	100
2014	39.9	54.8	5.3	100
総計	45.2	51.9	2.8	100

表5. 学級委員や生徒会役員の経験 (%)

年度	いる	いない	無回答	総計
2007	72.2	27.0	0.8	100
2008	80.8	19.2	0.0	100
2009	71.0	29.0	0.0	100
2010	73.5	26.5	0.0	100
2011	75.2	24.8	0.0	100
2012	74.2	25.8	0.0	100
2013	76.3	22.8	0.9	100
2014	71.2	28.8	0.0	100
総計	74.2	25.5	0.3	100

表5は学級委員や生徒会役員の経験を尋ねた結果である。毎年7～8割の学生が経験しており、大きな変動は見られない。また学部学科別でも一貫した傾向性は確認できなかった。

表6. ボランティア等の経験 (%)

年度	ある	ない	無回答	総計
2007	71.4	27.0	1.6	100
2008	69.7	30.3	0.0	100
2009	70.0	30.0	0.0	100
2010	61.4	38.6	0.0	100
2011	76.6	23.4	0.0	100
2012	74.2	25.3	0.6	100
2013	65.9	33.2	0.9	100
2014	64.4	35.1	0.5	100
総計	69.1	30.4	0.5	100

表6はボランティア等の経験を尋ねた結果である。おおむね6～7割の者が行っており、一貫した傾向はみられない。また学部学科別でも一貫した傾向性は確認できなかった。

2) 教職希望

表7は教職にどの程度就きたいと考えているのかを尋ねた結果である。2010年度までは希望が強くなり、50%以上が「教職に就きたいと強く考えている」と回答していた。しかしそれ以降、教職への希望は弱くなり、回答は分散している。

図2には学部学科別の推移を示したが、地域教育学科及び応用数理工学科で「教職に就きたいと強く考えている」と回答するものが多くを占め、他の学部学科との違いは鮮明である。地域教育学科は教職希望が強くなる傾向を示し、逆に応用数理工学科は弱くなる傾向がみられる。

表7. 教職希望

(%)

年度	教職に就きたいと強く考えている	職業の選択肢の中では上位に考えている	とりあえず、教員免許状を取得しておこうと考えている	あまり考えていない	その他の職業を考えている	総計
2007	34.9	32.5	30.2	0.0	2.4	100
2008	46.5	28.3	20.2	3.0	2.0	100
2009	49.0	29.0	21.0	0.0	1.0	100
2010	50.6	28.9	15.7	2.4	2.4	100
2011	40.1	28.5	27.0	3.6	0.7	100
2012	34.3	34.3	25.8	3.9	1.7	100
2013	31.5	25.4	37.1	3.4	2.6	100
2014	32.7	29.8	34.1	2.9	0.5	100
総計	37.7	29.5	28.5	2.7	1.6	100

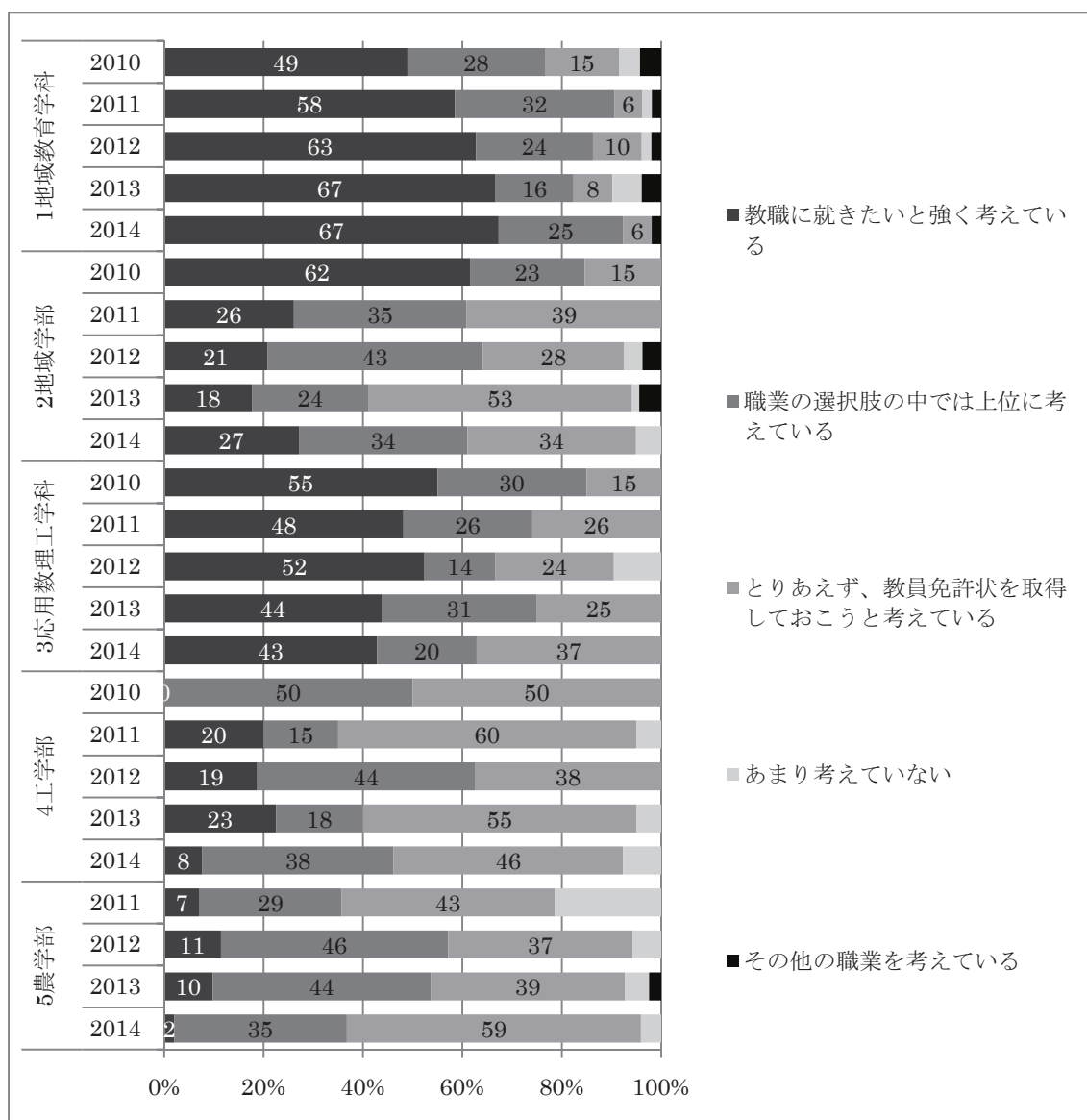


図2. 学部学科別教職希望

表 8 は教員採用試験の受験予定を尋ねた結果である。およそ 8 割の学生が受験予定である。図 3 は学部学科別の集計であるが、教職への希望と同じく、地域教育学科と応用数理工学科で受験予定の者が多い。工学部はやや低めの数字となっている。

表 8. 教員採用試験の受験予定 (%)

年度	受ける	受けない	記入ミス	無回答	総計
2010	83.1	15.7	1.2	0.0	100
2011	81.0	16.8	0.0	2.2	100
2012	74.7	22.5	0.0	2.8	100
2013	77.2	22.0	0.0	0.9	100
2014	79.8	18.3	0.0	1.9	100
総計	78.5	19.7	0.1	1.7	100

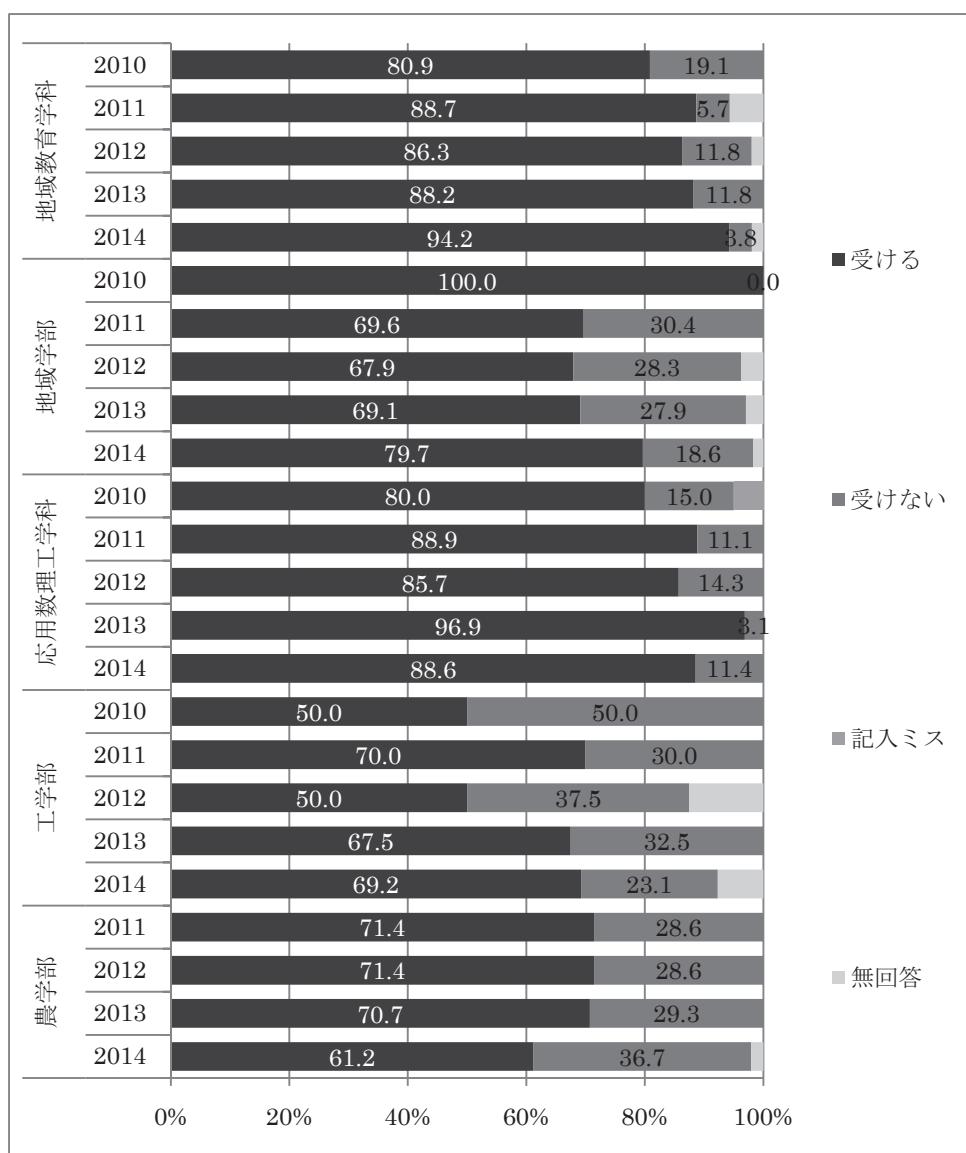


図 3. 学部学科別教員採用試験の受験予定

表9に学部学科別の免許取得を希望する免許種を示した。学部学科及び年度により増減があることが分かる。

表9. 学部学科別免許取得希望 (人)

学部学科	年度	特別支援	幼稚園	小学校	中学校							
					国語	数学	英語	理科	社会	技術		
地域教育学科	2010	2	19	27	2		2	1	1			
	2011	15	22	35	3	3	2	1				
	2012	9	15	34	2	3	6	1	1			
	2013	9	20	32	5	2	5			3		
	2014	10	18	33	4	3	11	1		6		
地域学部	2010				4		4	1	1			
	2011			2	5			10	2			
	2012			1	6		4	11	4			
	2013	1		1	13		9	9	14			
	2014			1	4	1	4	17	15			
応用数理工学科	2010			1		7		4				
	2011					16		1				
	2012					9						
	2013					17		4				
	2014					16		6				
工学部	2010							8		1		
	2011							2				
	2012											
	2013		1	2		1		11	1	1		
	2014							4	1	1		
農学部	2011							4				
	2012					2		10				
	2013							17				
	2014					2		26				
	総計		46	95	169	48	82	47	149	49	3	
比率		5.5	11.4	20.2	5.7	9.8	5.6	17.8	5.9	0.4		
					高校							
					国語	数学	英語	理科	地歴	公民	工業	農業
地域教育学科	2010				1	1		1				
	2011				1		2					
	2012				2	1	2		2			
	2013				4	1	5		2			
	2014				2	3	8		3			
地域学部	2010				3		5	1				
	2011				5		1	1	2	3		
	2012				11		4	16	6	3		
	2013				13		12	18	13	9		
	2014				6		5	17	6	6		
応用数理工学科	2010					9		5				
	2011					16		3				
	2012					15						
	2013					26		10				
	2014					19		15				
工学部	2010					1					1	
	2011					1		13			2	
	2012					1		10			2	
	2013					2	1	31	1		3	
	2014					2		8				
農学部	2011							7				4
	2012					3		22				8
	2013							31				8
	2014					1		35				3
	総計					48	102	45	244	36	21	8
比率					5.7	12.2	5.4	29.2	4.3	2.5	1.0	2.8

表10は教師になりたいと初めて思った時を聞いた結果である。総計では高校時代が最も多く、39.0%を占め、続いて中学校時代(30.1%)となっている。学部学科別の結果を示した図4からは、地域教育学科に小学校時代とする回答が多く、地域学部と応用数理工学科に中学校

時代、工学部と農学部に大学入学以後の回答が相対的に多いことが分かる。

表 10. 「教師になりたい」と初めて思った時 (%)

	小学校時代	中学校時代	高校時代(浪人時も含む)	大学入学以後	記入の必要なし	記入ミス	無回答
2007	11.9	34.1	44.4	7.1	2.4	0.0	0.0
2008	20.2	44.4	26.3	3.0	5.1	1.0	0.0
2009	19.0	32.0	40.0	5.0	1.0	1.0	2.0
2010	18.1	27.7	41.0	4.8	4.8	1.2	2.4
2011	14.6	29.2	41.6	9.5	4.4	0.0	0.7
2012	12.9	26.4	39.9	12.4	5.6	0.0	2.8
2013	11.2	27.6	36.6	17.7	5.6	0.0	1.3
2014	14.4	27.4	40.9	12.0	3.4	0.5	1.4
総計	14.4	30.1	39.0	10.5	4.2	0.3	1.4

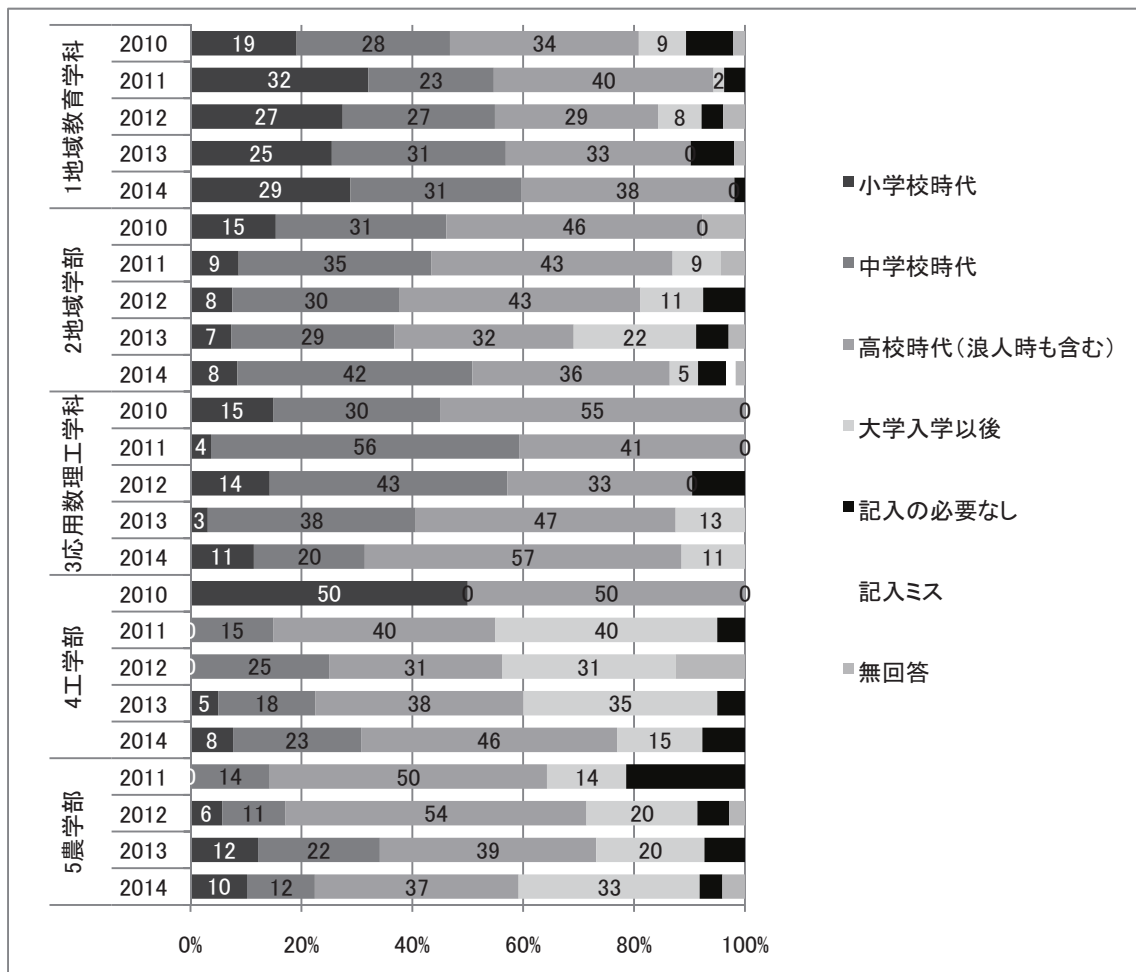


図 4. 学部学科別「教師になりたい」と初めて思った時

3) 先生の経験

「いいな」と思った先生がいたとする経験を学校種別に尋ねた結果が表 11 である。おおむね 70~90%の間で「いいな」と思った先生がいたとされており、高校、中学校、小学校の順番でいたとする割合が高い。

表 11. 「いいな」と思った先生がいたとする割合 (%)

年度	小学校	中学校	高校
2007	80.2	80.2	83.3
2008	77.8	84.8	90.9
2009	78.0	81.0	88.0
2010	68.7	79.5	86.7
2011	73.7	84.7	85.4
2012	68.5	75.3	83.1
2013	73.3	77.2	91.8
2014	69.7	79.8	89.4
総計	73.2	79.7	87.6

表 12 は「いいな」と思った先生がどんな先生だったのかを尋ねた結果である。総計で見ると、「児童・性との話を聞いてくれる先生」が小学校 (22.6%), 中学校 (23.9%) では最も多く、「進路指導をきちんとしてくれる先生」が高校 (20.4%) では最も多い。小学校では続いて「いけないことをきちんとしてくれる先生」(21.5%) で続き、中学校では「ユーモアのある先生」(17.9%) が続く。また高校では「幅広い知識を持っている先生」(12.9%) が 2 番目に多く、学校種による違いがある。

表 12. 「いいな」と思った先生は、どんな先生だったか (%)

		勉強で分 からないこ とがある と、分かる まで教えて くれる先生	いいな いことを きちんと 叱ってく れる先生	進路 指導を きちん として くれる 先生	児童・ 生徒の 話を 聞いて くれる 先生	休み時 間や放 課後に 一緒に 遊んで くれる 先生	児童・ 生徒の 自主性 を尊重 してく れる 先生	ユー モア がある 先生	「生き 方の モデル」 になる ような 先生	型 破り な先生	幅 広 い 知 識 を 持 っ て い る 先生	そ の 他	記 入 ミ ス	無 回 答	総 計
小学校	2007	2.8	20.8	0.0	30.2	11.3	1.9	18.9	1.9	3.8	0.9	1.9	1.9	3.8	100
	2008	1.2	26.8	0.0	23.2	20.7	1.2	15.9	2.4	0.0	1.2	0.0	0.0	7.3	100
	2009	3.4	26.1	0.0	21.6	9.1	5.7	15.9	3.4	0.0	0.0	2.3	4.5	8.0	100
	2010	6.1	22.7	0.0	24.2	6.1	7.6	18.2	4.5	3.0	0.0	0.0	1.5	6.1	100
	2011	1.8	23.4	0.0	19.8	11.7	7.2	19.8	2.7	1.8	1.8	0.0	4.5	5.4	100
	2012	8.9	13.8	0.0	20.3	13.8	4.9	19.5	7.3	2.4	2.4	1.6	0.0	4.9	100
	2013	5.8	18.1	0.0	21.1	13.5	7.6	22.2	2.3	3.5	2.3	0.6	0.0	2.9	100
	2014	2.1	24.7	1.4	22.6	12.3	11.0	15.1	4.1	3.4	1.4	1.4	0.0	0.7	100
	総計	4.1	21.5	0.2	22.6	12.5	6.3	18.5	3.6	2.5	1.5	1.0	1.3	4.4	100
中学校	2007	8.7	17.5	3.9	22.3	1.0	8.7	15.5	12.6	3.9	0.0	2.9	1.9	1.0	100
	2008	9.1	10.2	2.3	27.3	0.0	11.4	12.5	14.8	3.4	2.3	2.3	0.0	4.5	100
	2009	4.8	10.7	3.6	26.2	0.0	11.9	20.2	4.8	2.4	3.6	1.2	4.8	6.0	100
	2010	8.2	8.2	2.7	30.1	0.0	4.1	17.8	8.2	5.5	5.5	1.4	1.4	6.8	100
	2011	9.6	14.4	9.6	20.8	0.8	6.4	16.0	4.8	7.2	3.2	0.0	3.2	4.0	100
	2012	9.0	15.7	4.5	22.4	0.0	7.5	22.4	6.7	4.5	4.5	1.5	0.0	1.5	100
	2013	10.6	13.3	4.4	21.7	0.0	5.6	21.1	8.3	6.1	5.0	1.7	0.0	2.2	100
	2014	9.6	10.8	8.4	25.3	0.0	7.2	15.7	7.8	8.4	4.2	1.2	0.6	0.6	100
	総計	9.0	12.9	5.4	23.9	0.2	7.6	17.9	8.3	5.6	3.7	1.5	1.3	2.8	100
高校	2007	5.5	3.6	17.3	23.6	0.0	4.5	13.6	12.7	1.8	11.8	0.0	0.9	4.5	100
	2008	12.8	7.4	9.6	13.8	0.0	3.2	11.7	12.8	3.2	19.1	3.2	0.0	3.2	100
	2009	13.0	3.3	14.1	12.0	0.0	7.6	12.0	13.0	8.7	5.4	1.1	3.3	6.5	100
	2010	11.8	5.3	19.7	10.5	1.3	3.9	22.4	7.9	2.6	9.2	1.3	1.3	2.6	100
	2011	16.7	2.4	21.4	10.3	0.0	3.2	10.3	13.5	1.6	12.7	0.8	4.0	3.2	100
	2012	12.2	2.7	14.9	15.5	0.0	4.1	12.2	13.5	6.8	14.2	0.7	0.7	2.7	100
	2013	15.5	3.3	31.0	9.9	0.0	2.3	11.3	7.0	5.2	12.2	1.4	0.0	0.9	100
	2014	15.6	1.6	22.6	11.8	0.0	3.8	9.7	7.5	6.5	15.6	4.3	0.5	0.5	100
	総計	13.4	3.3	20.4	13.1	0.1	3.8	12.2	10.5	4.8	12.9	1.7	1.1	2.6	100

4) 教職に関する意識

教職に関する意識については、教職への自信、教師の認識、教職の考え方、就職において重視することの4つの側面から調査を行った。単問での集計では差異が読み取りにくいいため、2007年度から2014年度までの総計を示した後、因子分析を行い、因子ごとに年度及び学部学科の比較を行う。

将来教師になった場合、どのくらい自信が持てそうだと思うかについて、表9の各項目について尋ねた。上から順に自信をもっている順に並べ替えている。自信がある順に「子どもの気持ちを理解する」「同僚教師とうまくやっていく」「子どもたちからの信頼を得る」が続き、「人間的魅力がある」「幅広い知識がある」という項目は相対的に自信がないとされる。

表 13. 将来教師になった場合の自信 (%)

	とても自信がある	まあまあ自信がある	どちらともいえない	あまり自信がない	全然自信がない	記入ミス	合計
子どもの気持ちを理解する	12.6	52.9	24.4	8.5	1.5	0.1	100
同僚教師とうまくやっていく	12.8	47.7	29.7	8.2	1.6	0.0	100
子どもたちからの信頼を得る	9.7	43.3	35.5	10.1	1.4	0.1	100
自分なりの教育観を持っている	12.6	38.1	36.5	10.7	2.1	0.1	100
わかりやすい授業をする	4.8	31.5	41.0	20.1	2.6	0.0	100
保護者からの信頼を得る	6.4	26.1	45.1	17.9	4.3	0.2	100
学級運営面でのリーダーシップを発揮する	7.6	28.8	34.3	24.2	4.9	0.3	100
人間的魅力がある	4.0	19.0	45.7	24.8	6.5	0.0	100
幅広い知識がある	3.0	20.5	41.9	29.5	5.0	0.2	100

自信に関する9項目の因子分析の結果、子どもたちや保護者からの信頼、同僚教師とうまくやっていくといった項目を含む第一因子「人間関係因子」と、幅広い知識や分かりやすい授業と言った項目を含む第二因子「教科指導因子」を抽出した。

表 14. 将来教師になった場合の自信 (因子分析)

	人間関係因子	教科指導因子
子どもたちからの信頼を得る	0.823	-0.02
保護者からの信頼を得る	0.739	-0.03
同僚教師とうまくやっていく	0.697	-0.1
子どもの気持ちを理解する	0.582	0.052
人間的魅力がある	0.546	0.197
学級運営面でのリーダーシップを発揮する	0.405	0.299
幅広い知識がある	-0.16	0.817
わかりやすい授業をする	0.144	0.555
自分なりの教育観を持っている	0.162	0.378

因子抽出法: 主因子法 回転法: Kaiser の正規化を伴うプロマックス法

因子相関 0.646

ここで得た因子得点の平均値を比較した結果を図5に示した。両因子とも応用数理工学科が高く、自信を持っていることが分かる。一方地域教育学科は教科指導因子、農学部は人間関係因子が有意に低い(検定 Bonferroni, $p < 0.05$)。

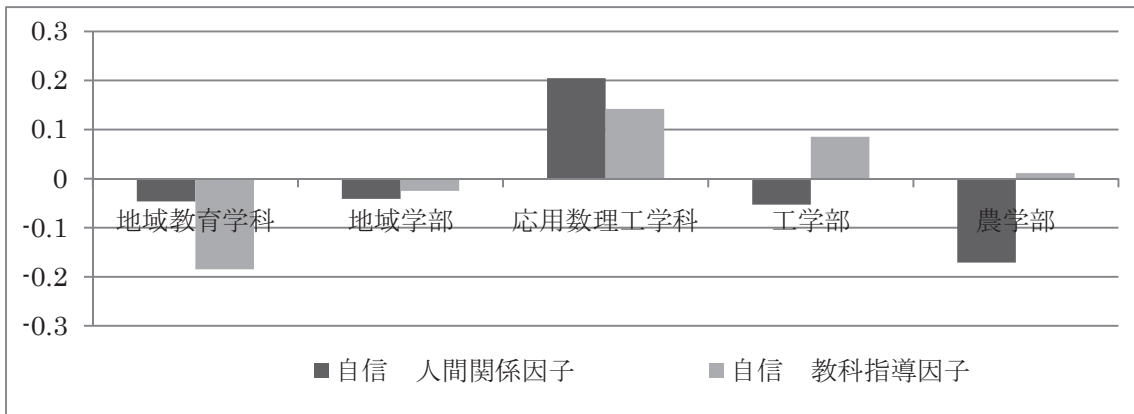


図5. 学部学科別自信に関する因子得点

図6は年度間の比較である。2011年度を境に両得点ともが低くなっているが、これは調査時期が4月から10月となり、学習を進めていく中でより謙虚に判断したとも考えられる。

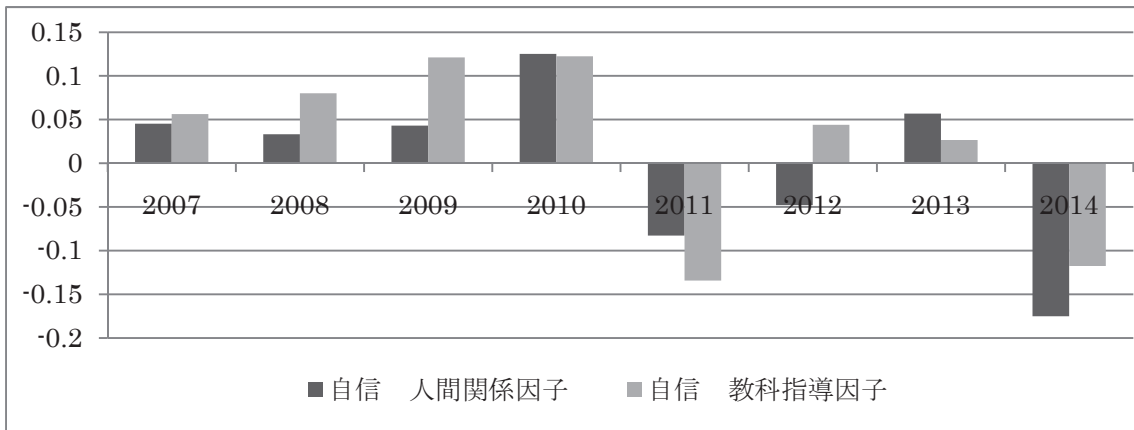


図6. 年度別自信に関する因子得点

表15は、教師の現状認識について聞いたものである（肯定的な回答が多い順に並べ替え）。自分の自信とちょうど逆に「幅広い知識を持っている」が最も肯定される結果となった。

表15. 現場の教師の評価

(%)

	とても そう 思う	まあ そう 思う	あまり そう思 わない	全然そ う思わ ない	記 入 ミス	無 回 答	合計
幅広い知識を持っている	25.5	55.7	17.0	1.6	.1	.1	100.0
自分なりの信念を持って、教育活動に臨んでいる	10.2	59.7	28.0	1.9	0	.1	100.0
研究熱心である	12.0	50.0	34.5	3.4	0	.1	100.0
社会経験が豊かだと思う	15.2	45.2	32.6	7.0	0	.1	100.0
愛情豊かな人が多い	9.8	44.2	40.9	4.9	0	.2	100.0
学級運営にあたりリーダーシップを発揮している	7.3	46.6	41.0	4.9	0	.3	100.0
生徒に対して細やかな気配りを十分にしている	8.1	44.8	40.9	5.9	0	.3	100.0
人間的に優れた人が多い	7.9	42.3	43.0	6.6	0	.2	100.0
保護者からの信頼を十分に得ている	3.4	43.5	47.0	5.9	0	.2	100.0
教材研究(授業準備)をする時間が十分にある	3.6	38.6	43.8	13.8	0	.3	100.0

上記10項目の因子分析を行った結果、表16の通り、愛情や気配りなどの第一因子「人間関係因子」と、幅広い知識や社会経験、研究熱心などの第二因子「教科指導因子」を抽出すること

とができた。

表 16. 現場の教師の評価(因子分析)

	人間関係因子	教科指導因子
愛情豊かな人が多い	0.826	-0.149
生徒に対して細やかな気配りを十分にしている	0.636	-0.045
保護者からの信頼を十分に得ている	0.589	0.065
人間的に優れた人が多い	0.550	0.195
学級運営にあたりリーダーシップを発揮している	0.409	0.230
幅広い知識を持っている	-0.130	0.782
社会経験が豊かだと思う	0.043	0.633
研究熱心である	0.050	0.540
教材研究(授業準備)をする時間が十分にある	0.015	0.413
自分なりの信念を持って、教育活動に臨んでいる	0.265	0.358

因子抽出法: 主因子法回転法: Kaiser の正規化を伴うプロマックス法

因子相関 0.629

現場の教師の現状認識については、有意差はなかったものの、両因子とも地域教育学科の評価が高い結果となった。

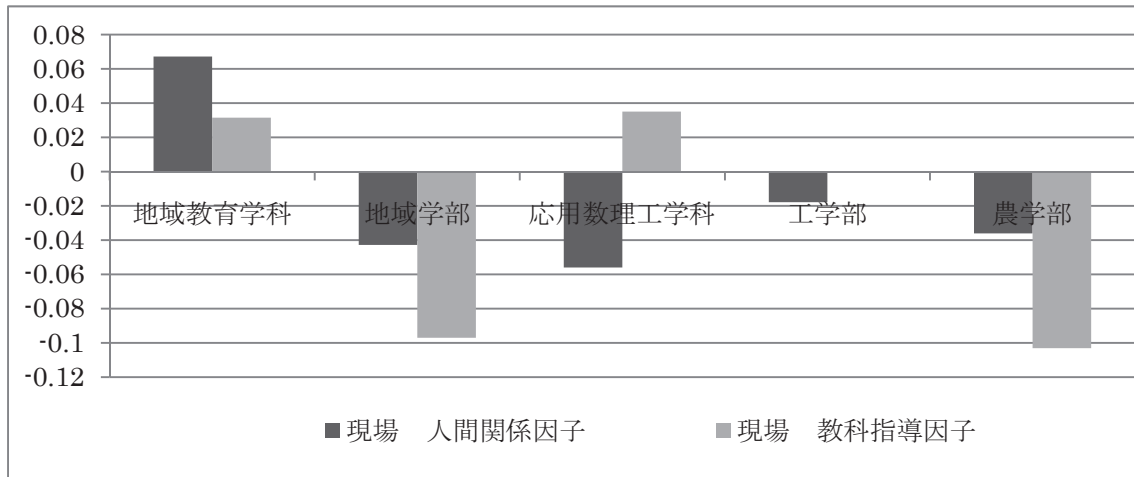


図 7. 学部学科別現場の教師の評価に関する因子得点

一方年度間の比較では、2014年度がいくつかの年度に比べて有意に高い結果が得られた(検定 Bonferroni, $p < 0.05$)。

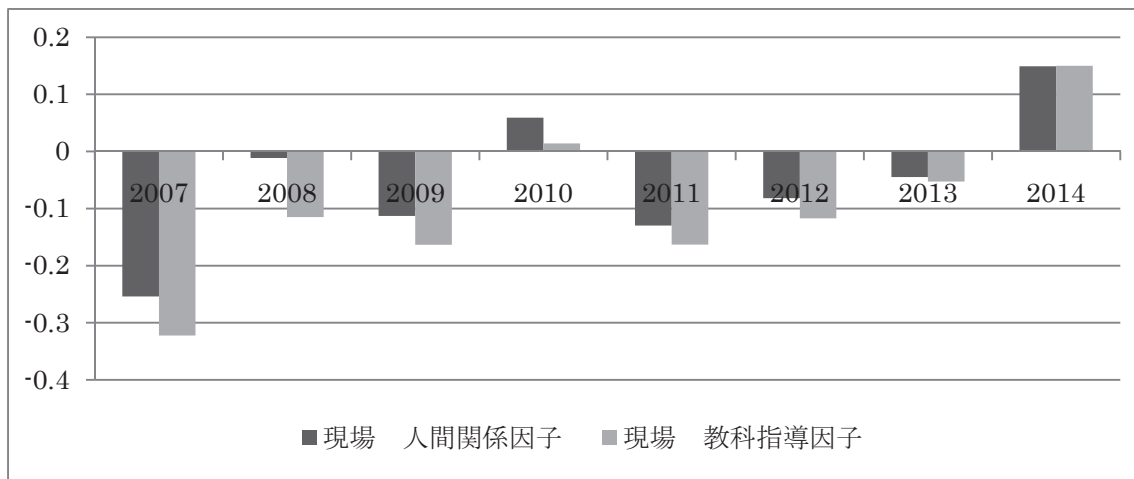


図8. 年度別現場の教師の評価に関する因子得点

教職に関する考え方を尋ねたのが表17である(肯定が多い順に並び替え)。「教師は、やりがいのある仕事である」「教師は、学ぶことのおもしろさに、子ども(児童・生徒)を導く職業である」という意見については半数近くが「とてもそう思う」と回答している。逆に「全然そう思わない」が半数近いのが「教師の仕事量は、勤務時間内に収まるものである」という考え方である。

表17. 教師に関する考え方 (%)

	とても そう 思う	まあ そう 思う	あまり そう思 わない	全然そ う思わ ない	記入 ミス	無 回 答	合 計
教師は、やりがいのある仕事である	48.8	45.2	4.9	0.6	0.1	0.4	100
教師は、学ぶことのおもしろさに、子ども(児童・生徒)を導く職業である	48.7	45.0	5.3	0.7		0.4	100
教師は、「専門的知識」よりも「優れた人間性」を必要とする職業である	21.3	57.9	18.2	2.1	0.1	0.5	100
家庭や地域社会は今よりも学校運営に関わるほうがよい	24.7	46.6	24.3	3.6	0.0	0.8	100
教師は、学校外での子どもの生活にも配慮をするべきである	19.0	54.2	22.4	4.1		0.4	100
子どもの教育に関しては、教師と親は対等な立場にあるべきだ	25.0	43.0	26.8	4.6		0.6	100
教師は、「尊敬される職業」である	15.2	43.8	34.3	6.3	0.1	0.3	100
教師は、私生活でも模範的であるべきだ	14.2	44.4	34.1	6.7		0.6	100
教師の体罰は、場合によっては必要である	14.6	40.3	30.3	14.3		0.6	100
教員給与は、成果に応じて査定して決定する方法がよい	9.2	33.3	48.0	9.0		0.4	100
教師は、熱意と愛情があれば務まる(勤まる)職業である	4.1	27.7	52.4	15.4		0.4	100
教師の仕事量は、勤務時間内に収まるものである	2.7	9.0	43.5	44.5		0.3	100

上記12項目をもとに、因子分析を行い(4項目は共通性が低い等の理由で除外)、表18の通り、8項目から2因子を得た。第一因子は、やりがいや子どもを導く、生活への配慮、開かれた学校運営など、生徒や保護者との相互作用を重視する因子「相互作用因子」とした。第二因子は個人的な素養や努力によるところが大きい「個人資質因子」とした。

表18. 教師に関する考え方(因子分析)

	相互作用 因子	個人資質 因子
教師は、やりがいのある仕事である	0.609	-0.029
教師は、学ぶことのおもしろさに、子ども(児童・生徒)を導く職業である	0.490	-0.079
教師は、学校外での子どもの生活にも配慮をするべきである	0.430	0.122
家庭や地域社会は今よりも学校運営に関わるほうがよい	0.422	-0.016
教師は、熱意と愛情があれば務まる(勤まる)職業である	0.042	0.586
教師の仕事量は、勤務時間内に収まるものである	-0.285	0.449
教師は、「専門的知識」よりも「優れた人間性」を必要とする職業である	0.178	0.338
教師は、私生活でも模範的であるべきだ	0.249	0.309

因子抽出法: 主因子法回転法: Kaiser の正規化を伴うプロマックス法

因子相関 0.350

「相互作用因子」においては、地域教育学科が他のすべての学科に対して有意に高く、個人資質因子に関しても有意差はないが他学科よりも高く評価していることが明らかとなった(検

定 Bonferroni, $p < 0.05$)。

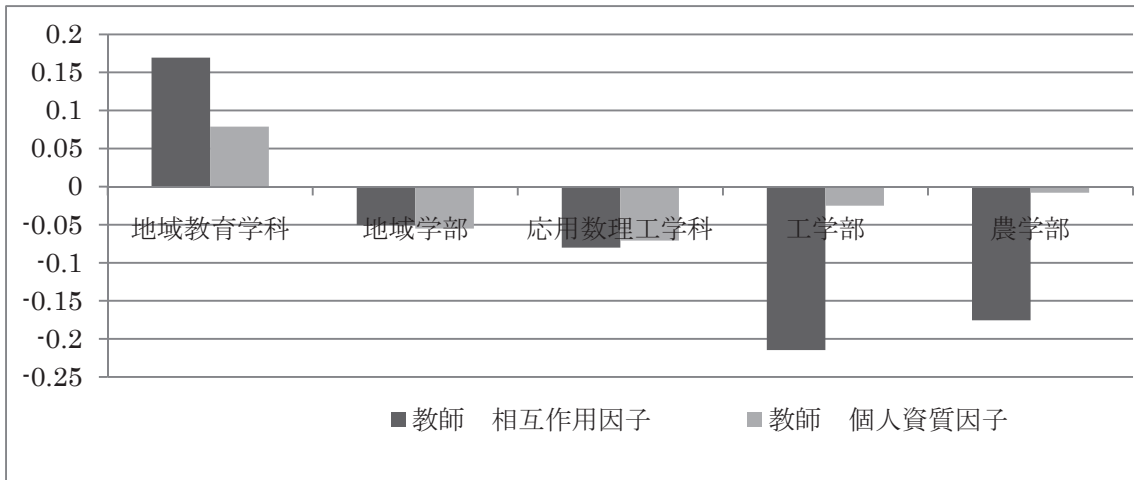


図9. 学部学科別教師に関する考え方の因子得点

年度間の因子得点の平均値の比較では、一貫した傾向性は見られなかった。

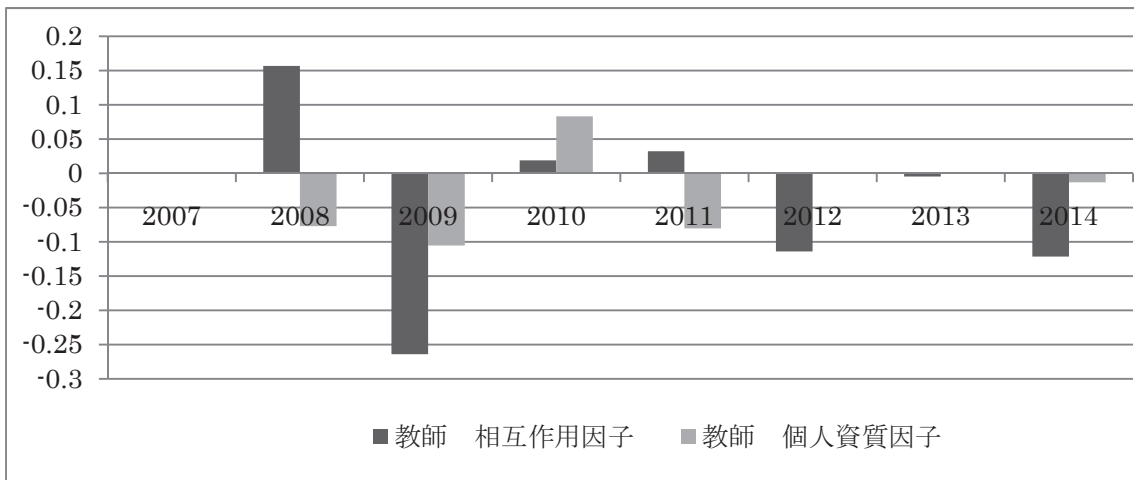


図10. 年度別教師に関する考え方の因子得点

職業選択の際に重視することとしては、「やりがい」が最も強く、「かなり重要」との回答が66.1%を占める。続いて「安定性」(同48.8%),「収入」(同38.7%)と続き,「仕事量」「社会的評価」「家族の意見」は相対的に重視されていない(表19)。

表19. 職業選択で重視すること (%)

	かなり重要	まあ重要	あまり重要 ではない	全然、重要 ではない	無回答	合計
やりがい	66.1	29.8	2.5	.7	.8	100
安定性	48.8	46.8	2.9	.5	.9	100
収入	38.7	54.8	5.2	.5	.8	100
専門的知識・技量	32.7	57.8	7.7	.9	.9	100
将来性	31.0	57.4	9.9	.9	.8	100
勤務地	32.9	48.0	15.2	3.0	.9	100
仕事量	15.9	68.7	13.3	1.1	1.0	100
社会的評価	12.2	52.1	30.7	3.9	1.1	100
家族の意見	10.0	41.6	35.9	11.6	.8	100

上記9項目の因子分析の結果,表20の通り,安定性や収入,仕事量を項目に含む第一因子「労働条件因子」と,社会的評価や家族の意見を含む第二因子「意味因子」を得た(一項目を

分析から除外)。

表 20. 職業選択で重視すること (因子分析)

	労働条件因子	意味因子
安定性	0.790	-0.134
収入	0.742	-0.088
仕事量	0.434	0.145
社会的評価	0.079	0.574
家族の意見	-0.018	0.495
将来性	0.272	0.488
専門的知識・技量	-0.045	0.449
やりがい	-0.153	0.407

因子抽出法: 主因子法回転法: Kaiser の正規化を伴うプロマックス法

因子相関 0.575

有意性はなかったが、工学部で「労働条件因子」が比較的高い値を示している (図 11)。

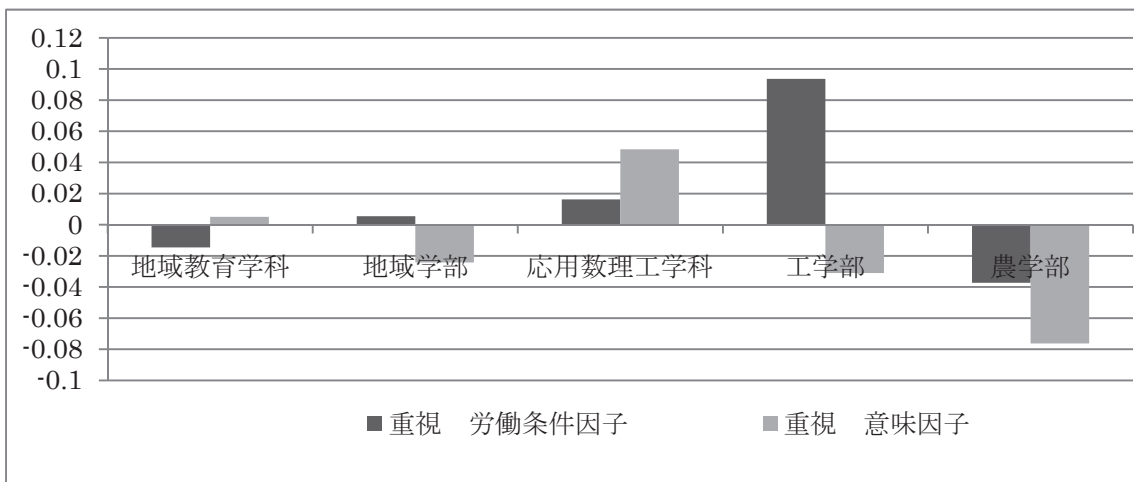


図 11. 学部学科別職業選択の考え方の因子得点

年度間の比較 (図 12) では、「労働条件因子」で 2014 年度が 2008 年度よりも有意に高く、両因子とも現在に近づくほど高くなる傾向を示している (検定 Bonferroni, $p < 0.05$)。

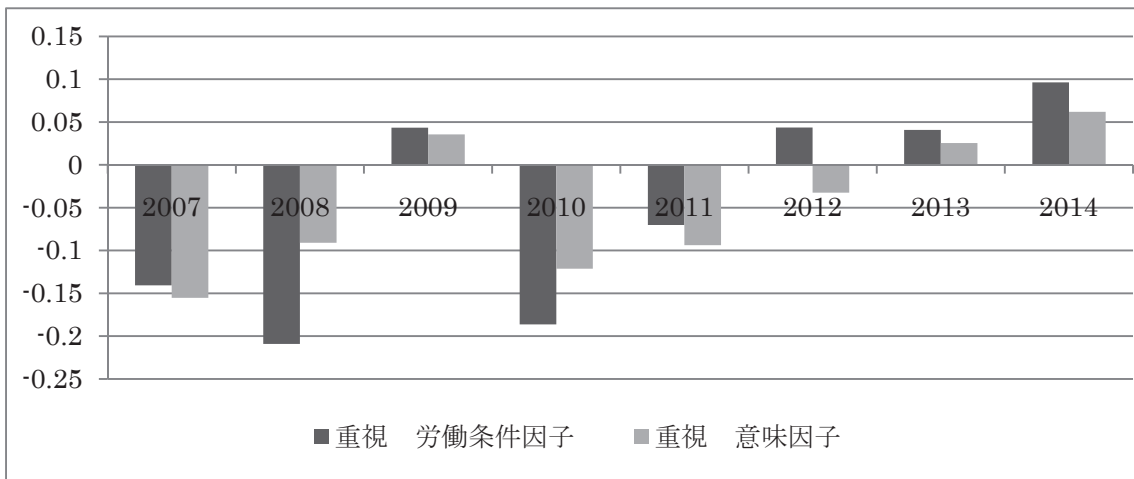


図 12. 年度別職業選択の考え方の因子得点

3. まとめと今後の課題

以上、2007~2014 年度実施の調査から比較結果を示した。今回の分析から得られた示唆は、

学部学科に即したカリキュラムの検討と年度進行に伴う就業意識等の変化に即した教職指導の必要性である。前者の学部学科は、希望する学校種の違いや意欲、自信のあり方、教師の評価や教師に関する考え方など、多くの事項に影響を与えていた。後者の年度進行については、大学卒業者の就職率などとの関連を検討しなくてはならないが、職業選択の考え方や教師に対する考え方などが変容していく様子が確認された。また半期遅れの調査となった 2011 年度以降とそれ以前を比較すると、そこで意識が大きく変わっており、これが 2 年次以降も変容することが予想される。

今後も毎年度の調査を継続し、教員免許状取得希望学生の実態把握ができるデータを蓄積していくとともに、詳細な比較考察を並行して進めていく予定である。今後の調査および考察にあたっての課題をあげるとすれば、たとえば、学年進行を見通す調査と分析、教育実習前後の意識調査との相互分析、他大学等の関連する調査結果との比較検討などが挙げられる。それとともに、他学部も含め、学部・学科の専門科目と教職科目の調整や、年度進行に伴う就業意識等の変化に即した教職履修指導・教職相談など、教職カリキュラム全体の調整および運営の方針等を検討することになる。また、工学部改組に伴い、教職課程認定申請を受けたため、2015 年度の入学者から適用される教職関連授業等の履修編成の経過をみる必要もある。さらには、昨年 11 月に出された、中央教育審議会教員養成部会によるとりまとめ報告『これからの学校教員を担う教員の在り方について』（2014 年 11 月）で養成分野の課題としてあげられている、「新しい指導力の養成：主体的・協働的に学ぶ授業を展開できる力／各教科横断的な視野で指導できる力／学校段階間の円滑な移行を実現する力」、「近年の教育改革の方向に合わせた教員養成課程の充実：特別支援教育、小学校英語の教科化、道徳の教科化、ICT の活用など／生徒指導や学級経営を行う力／豊かな人間性やたくましさ求められる教員」といった教員の力量形成に関して、開放制教員養成における教職カリキュラムにおいて、それらをどのように実現していくのか（できるのか）について検討することになるであろう。